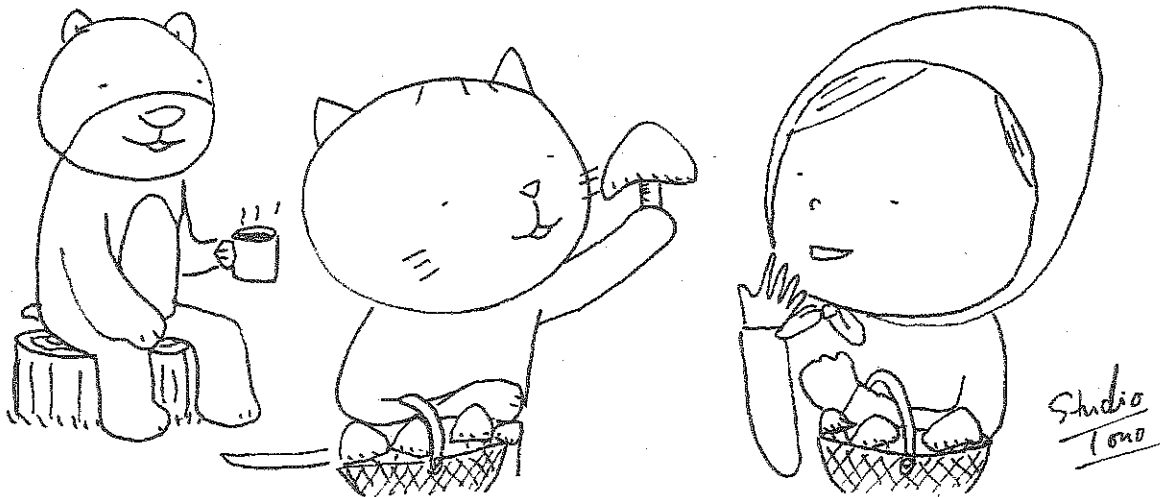
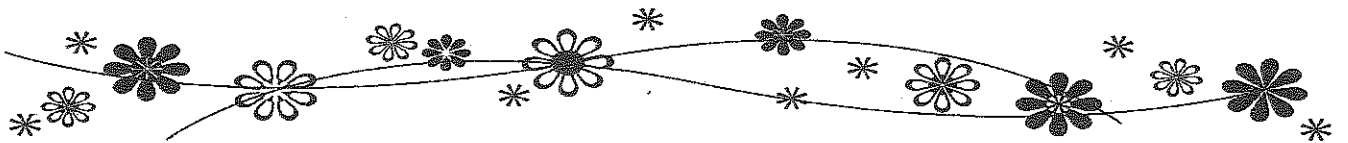


ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

# この本よんだ？

～りいふる BOOK プラス～

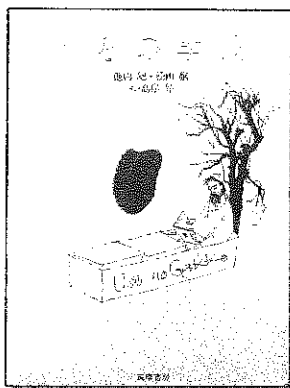


## うその学校

池内紀・松山巖 著 高岸昇 絵 筑摩書房 1994年 (K:エッセイ・文学)

本書は律儀に1ページ目から読む必要は全くなく、パラパラページを繰って、好きなところから読める仕組みになっている。

「この世はウソで成り立っているが、夢のようなロマンを生み出すウソ、正義をもたらすウソ…たわいのないウソから思想としてのウソまですべてを網羅したい」として、



「愛・老・銭・芸・家…」など13のテーマを設け、テーマごとに両著者の文章、そして抜群の挿絵がついている。

博学な二人は、古今東西の著名人の逸話などをさりげなく引用しながら、やさしい言葉で深いことを書いている。ものの見方の多様性、ものごとの斬新なとらえ方などに、眼を開かれた思いがした。

一話を熟読玩味し、挿絵に見入ったとしても、ものの5分もかからない。なにかの合間に読む、隙間読書に最適な本だと思う。

(大空)

# 資生堂インパクト

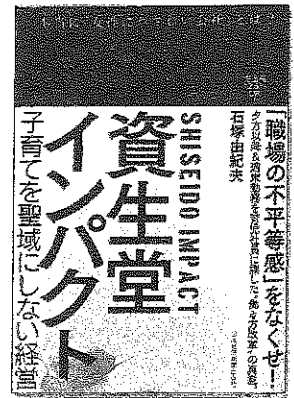
子育てを聖域にしない経営

石塚由紀夫 著 日本経済新聞出版社 2016年 (B:労働・法律)

資生堂が2014年春から育児中の短時間勤務制度を利用する美容部員に対しても夕方以降や週末に勤務を課すことを通達した、というニュースは驚きと共に報じられました。女性に優しい企業であるというイメージの資生堂がなぜ?と。私はこのニュースに興味を持ち続けていましたが、本書はその問いに答えてくれます。

重要なことは、資生堂のこの改革が後退ではなく、前進であることです。資生堂の考える「女性活躍の3ステージ」によると、第1ステージは女性が出産により働き続けるのが困難な状況です。そこから子育て支援が整い、女性は育児をしながら働き続けることのできる第2ステージに進みます。そして、第3ステージは「男女ともに子育てや介護などを

しながらもしっかりキャリアアップでき、仕事で会社に貢献できる」状態と定義されています。「資生堂インパクト」はまさに、第2ステージから第3ステージへと会社が前進するために必要な改革であったと言えます。社内で子育て支援が十分に整った上で、職場の不平等感を無くし、すべての女性がキャリアアップを目指すべきだという目的が込められていたのです。一步先を行く企業の考え方を学べるという点でも、多くの方にとって勉強になる内容かと思えます。ぜひ読んでみて下さい。(A.T.)



# 永い言い訳

西川美和 著 文藝春秋 2016年 (K:エッセイ・文学)

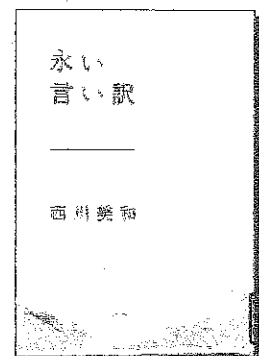
最も身近な人を突然失った時、それぞれ置かれた立場で、どのように人生を再生していけばいいのか。本書は冷え切った関係の妻を不慮の事故で亡くした主人公である作家が、同じ事故で母を亡くした家族と関わりながら、初めて妻と向かい合う。

章によって一人称や三人称に切り替わることにより、別の視点が加わり主人公の変化する感情が手に取るように伝わって来る。尚且つ、映画監督である著者の筆力が優れていて、本書の中には虚像の人間は一人もない。実生活で生きている人間が本書に住んでいる。だからである。本書を読み進めていくうちに題名である「永い言い訳」を自分

に重ねる箇所を見つけることができる。最初は毛嫌いしたくなるタイプの主人公だったが、とめどない後悔や喪失感を抱えながら、色んな人と出会い向き合うことにより、不器用ながらも少しずつ変化している過程に同調し涙してしまう。

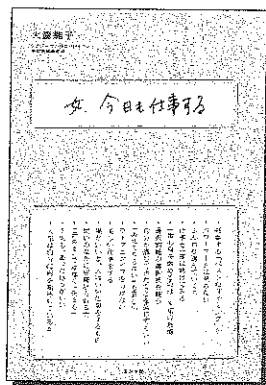
読破した後は、何かが変わる1冊になるかもしれません。ぜひ、読んでみて下さい。

(K)



## 女、今日も仕事する

大瀧純子 著 ミシマ社 2015年 (B:労働・法律)



昔、女性は結婚、出産、育児、介護、家事という仕事のため一生働き続けるという事は難しかった。しかし、その期間だけ仕事を減らしたり、休んだりすると、また続ける事ができるという風潮になってきてい

るのではないかと。そして、その女性のいろいろな人生経験やアイデアを生かすと仕事が上手くいったり、ヒット商品が生まれたというようなメリットもある。また、人口減少による

働き手の不足という面からいっても女性の力というものはこれからは見逃せないだろう。

本書は、女性である著者が妊娠・出産により仕事をやめざるをえなかったが、その後育児をしながら仕事をみつけ、小さな会社の社長になるまでの話と教訓をまとめたものである。そこには失敗談や苦労話もある。未熟ながらも経験したことを話したり、本にまとめてみるということであらためて自分を見直すということをしている途中の本ではないだろうか。子育て中の方、そして、女性ながら仕事を続けて無事リタイアを迎えた人が体験談を語るときに参考にして欲しい。

(か)

## 紀州のエジソンの女房

島精機を支えた  
肝っ玉母さん・島和代物語

梶山寿子 著 中央公論新社 2016年 (J:自伝・評伝)



この本は島精機という、和歌山が世界に誇るグローバル企業の創業者、島正博夫人和代の一代記である。

和歌山市周辺の方は御存知だったかもしれないが、紀南に住む私はこの本を読んで

和代さんのことを初めて知った。でも、もうお会いすることはできないと思うと、とても残念な気がする。

「紀州のエジソン」と呼ばれた島社長を支

えてこられた、本当に魅力的な女性だったと思うからである。

信じられないような極貧生活、倒産の危機。長男の勘当、乳ガンとの闘いなど色々な苦難を乗り越えられてきた一生は、誰しも共感できる部分があるのではないだろうか。

この本を読み終わった後、多少の困難な事や心配な事を抱えている人も、「まだまだ、もっと」と頑張る気力と、肩ひじ張らずにやっていたらいいんだという何かホッとするような暖かいものが湧いてくるだろう。

(花賀)

# 結婚と家族のこれから 共働き社会の限界

筒井淳也 著 光文社 2016年 (C:家族・結婚)

この本は結婚や家族、共働き社会、家事分担などについて書かれた本です。しかしながら、男女共同参画的な家族のあり方を手放しで肯定した本ではありません。冷静に社会的な見地から共働き社会がもたらすかも知れない意外なマイナス点も説明した、著者曰く「家族についての『教養本』」です。

第一章「家族はどこから来たか」では、家制度の成立から現在までを振り返ります。第二章「家族は今どこにいるか」では見合いや恋愛など結婚に至る出会いの歴史について。第三章「家事分担はもう古い？」では、家事労働の外部化と所得格差の関係など。第四章「『男女平等家族』がもたらすもの」では共働き社会が格差を広げる可能性について。第五章「『家族』のみらいのかたち」ではカップル関係の未来を論じています。

本書では、共働き社会が格差社会を助長するという可能性が論じられます。かと言っ

て男女共同参画社会を否定しているわけではありません。偏らない価値観で、できるだけ幅広い知見を紹介しようという著者の姿勢が感じられ、正に「教養本」として価値の高いものだと思います。

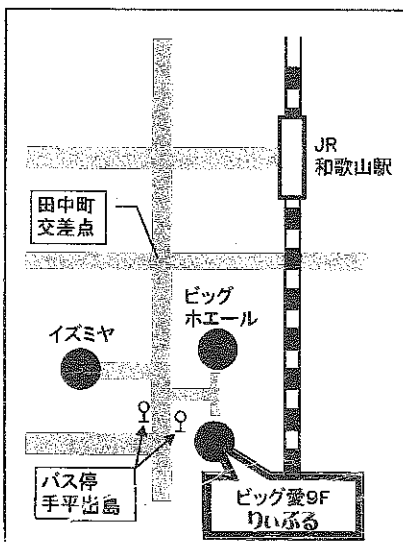
家族、結婚、仕事、これらのあり方は決まった答えがあるわけではなく、人口構成や経済状況によっても左右される複雑なものです。本書は夢のような解決策はないと言っているような気がして、とても考えさせられます。結婚や家族について関心のある人には必読の書ではないでしょうか。

(O.S)



## ※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ  
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他  
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



この本 よんだ? 第15号 (2017年10月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

### 【編集後記】

和歌山県の施策の中にも「女性が働きやすい環境づくりを」というものが含まれていたせいか、りいぶるの図書室にもそんな図書が含まれてきました。今回は何冊かその中から取り上げています。誰もが働きやすく、暮らしやすい和歌山になるといいですね。次回は2018年3月発行を予定しています。

E-mail [libreplus@yahoo.co.jp](mailto:libreplus@yahoo.co.jp)

ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。